

	目次
第19回大会関連	P1 回族自治区から見る中国社会学(2) P13
大会プログラム	P4 留学雑記 P15
大会会場へのアクセス	P7 事務局からのお知らせ P16
ご挨拶と会長就任マニフェストの結果報告	P8
中国研究の動向	P11

■第19回大会関連

■日中社会学会第19回大会を

お受けするにあたって

陳立行

(第19回大会実行委員長・日本福祉大学)

昨年6月、島根県立大学で開催された大会総会において、日本福祉大学が第19回大会の開催をお引き受けしたものの、かなりの不安を感じておりました。と言いますのは、中国の高度経済成長が10年以上続くなか、格差問題、環境問題、民族問題、地域社会崩壊などの難問が積み重ねられ、社会学者に対して大きな課題を突きつけています。日中社会学会の大会で、これら中国社会学が抱えている難問と関連させ、同時に、会員諸氏の研究関心や成果を反映させるには、どのようにすべきか悩んでいるのです。

3月からNHKが放送した中国社会学を紹介するシリーズ番組を見ました。大企業や大人物ではなく、ごく平凡な人に目を向け、彼らの日常生活から中国社会学を紹介していたのが非常に印象的でした。その中からは、中国経済の光と陰が浮き彫りにされていました。中国では「調和」だけでなく、「共生」つまり弱肉強食

でなく、すべての人びとは相互依存しなければならないという理解が必要不可欠だとつくづく感じました。

ここからヒントを得て、今大会の企画として、次のものを考えました。

- (1) 人口13億人の中国社会学における「調和」と「共生」に向けた課題と可能性について

シンポジウム「中国の社会学の行方——調和と共生」を本学のCOEと共同開催で企画しました。中国社会学科学院・社会研究所前所長の景天魁先生をお招きし、基調講演をしていただきます。

- (2) 「科研費セッション」の設置

科研費が文部科学省の競争的研究費として位置づけられています。「科研費セッション」の設置を通じて、進行中のプロジェクト研究の質の向上と、若手研究者によるプロジェクト企画能力の向上をサポートすることが狙いです。

(3) 会員著書の合評会を基にしたミニシンポジウムの開催

会員著書の合評会を基にしたミニシンポジウムを設け、著者の狙いと読者の理解をそれぞれ述べてもらいます。今後、会員が著書を執筆されるにあたり参考になることを期待しています。

不安がたくさんありますが、学会役員の皆様のお支えと大会担当理事の過放先生とご相談しながら、企画を進めてまいります。

ご多忙の折ではございますが、会員の皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

追記：

本学の名古屋キャンパスは2棟の建物ですが、駅前に位置する大学ですので、交通がきわめて便利です。ぜひご来校ください。

〈第19回大会開催要項〉

日時：2006年6月2日・6月3日

会場：名古屋市

日本福祉大学名古屋キャンパス

参加費：一般 2000円

学生 1000円

非会員 2000円

懇親会費：5000円（一般）

2500円（学生・退職者ほか）

懇親会会場：銀座ライオン鶴舞店

（大会会場から100m）

大会プログラムは4頁～6頁、会場アクセスについては7頁をご覧ください。

■日中社会学会

第19回大会の開催にあたって

過放（大会担当理事）

19回目を迎える大会は、今年6月2日～3日にわたり日本福祉大学名古屋キャンパスで開催されることになりました。開催校の所在地である名古屋市は、ご存知のように東京と京都の間に位置し交通の便利な「中京」都市です。ぜひふるって大会にご出席ください。皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

今回は、中国社会科学の最新動向を追って検討するためいくつかの試みをあわせて行いたいと思います。

(1) 基調講演は、中国社会科学院院士、社会研究所研究員景天魁氏から、中国がいかんして和諧社会を目指そうとしているかについて報告をお願いしました。この基調講演では、中国国内の社会学者が自ら行うことにより、和諧社会構築のメカニズムに関して意味深い示唆を与えてくださるのではないかと考えています。

(2) 大会初日に国際シンポジウム「中国社会科学のゆくえ——共生と調和」を企画させていただきました。階層格差、社会福祉、都市と農村、伝統思想と調和など中国社会科学が直面している主な課題をめぐって中国と日本の研究者からその核心を迫る試みです。

(3) 翌日の6月3日に、中国都市社区研究などを題目にして2つの部会を開く予定です。これは今大会で初めて試みる科研費セッションです。またその後、会員著書の合評会も行う予定です。会場から活発な議論を期待しています。

(4) 今年も多くの方から自由発表の申込をいただきました。多角的な視点から中国社会科学の変容を見つめようとするオリジナリティな発表を楽しみにしています。

会員みなさま、大会でお会いしましょう。

■日中社会学会第19回大会 開催校の連絡先

●大会前日まで

日本福祉大学情報社会科学部 陳立行研究室
〒460-0012

愛知県名古屋市中区千代田 5-22-35 名古屋
キャンパス

TEL : 0569-20-0118 (内線 2330)

E-mail chen@n-fukushi.ac.jp

●大会当日

日本福祉大学名古屋キャンパス COE
office : 052-242-3082

■第19回大会 論著資料の配布コーナー 及び書籍販売コーナー設置のお知らせ

首藤明和 (庶務担当理事)

大会参加者相互による論著資料の配布コーナー (受付付近) を設置します。

是非、論文、研究報告書など、お手元にある論著資料をご持参ください。論著資料は、抜刷、コピーどちらでもかまいません。設置コーナーにて配布していただきます。

また、会員諸氏の著書などをそれぞれ持ち寄っていただき、販売する、書籍販売コーナーも設置します。情報交換や研究成果のアピールの場として、この機会を是非、ご利用ください。

■大会担当理事過放の連絡先

桃山学院大学社会学部 過放研究室
〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1-1
Tel 0725-54-3131 (代)
E-mail guo927@andrew.ac.jp

■第19回大会 中国の大学・中国の研究 機関紹介コーナーなど設置のお知らせ

首藤明和 (庶務担当理事)

中国の大学・中国の研究機関の紹介コーナーを設置いたします。中国の大学・研究機関に関する資料やコピーなどを、みなさまから持ち寄っていただき、学会参加者のあいだで情報交換することを目的とします。海外を活動拠点とする「在外会員」との研究者ネットワークの構築や留学先の情報収集など、幅広い研究者・研究交流のきっかけとなることを願っております。

また、若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介などに関する資料配布コーナーも設置します。ご希望の方は大会当日、関係資料を持参の上、当コーナーにて展示、配布するなど、各自ご利用ください。

日中社会学会第19回大会プログラム

開催日：6月2日（土）・6月3日（日）

会場：日本福祉大学（名古屋キャンパス8F）

（JR・地下鉄 鶴舞駅から200m）

（注）プログラムは一部変更となる可能性があります。

当日会場にて配布される資料でご確認ください。

第1日 6月2日（土）

- 12：00～ 受付
- 13：00～13：15 開会式（8階大教室 8ABC）
中村則弘会長挨拶
日本福祉大学・宮田和明学長挨拶
司会 永野 武（松山大学）
- 13：20～14：15 基調講演「構築和諧社会的機制」（8階大教室 8ABC）
景 天魁（中国社会科学院・社会学研究所前所長・院士）
司会 陳 立行（日本福祉大学）
通訳 鍾 家新（明治大学）
- 14：30～16：30 国際シンポジウム「中国社会のゆくえ——共生と調和」
（8階大教室 8ABC）
司会 陳 立行（日本福祉大学）
討論者（予定）（五十音順）
黒田由彦（名古屋大学）
小林一穂（東北大学）
駒井 洋（中京女子大学）
首藤明和（兵庫教育大学）
袖井孝子（お茶の水女子大学）
中村則弘（愛媛大学）
羅 紅光（中国社会科学院・社会学研究所）
- 16：35～17：30 総会（8階大教室 8ABC）
- 18：00～20：00 懇親会（銀座ライオン鶴舞店：大会会場から100m）

第2日 6月3日(日)

9:00～ 受付

9:30～12:00 一般自由報告

一般自由報告A(8階 8A)

司会 東美晴(流通経済大学)

- ・アラタンバートル(神戸大学大学院)
「中国のモンゴル族にみる言語継承と教育実践——内モンゴル農村地域における学校選択を中心に」
- ・植村広美(呉工業高等専門学校)
「農民工子女の教育機会の保障に関する地方政府の役割」
- ・リブネ宮崎紀子(香港中文大学日本研究学科)
「香港社会における中等教育機関での日本語教育の現状——需要と問題点を中心に」
- ・合田美穂(香港中文大学歴史学科)
「中国と東南アジアにおける関係の中での香港の役割」

一般自由報告B(8階 8C)

司会 根橋正一(流通経済大学)

- ・宮内紀靖(中国瀋陽師範学院)
「中国の現今の社会変化は社会構造変動なのか」
- ・賽漢卓娜(サイハンジュナ)(名古屋大学大学院)
「日本の都市近郊農村に嫁ぐ中国人妻にとっての『農村』と『農家の嫁』」
- ・晨光(神田外語大学)
「ソーシャル・キャピタル投資と社会発展」

13:15～15:15 科研費セッション

科研費セッションA「中国都市社区研究」(8階 8A)

司会 南裕子(一橋大学)
コメンテーター 鍾家新(明治大学)

- ・蔡燐(同済大学)「社区データー・ケア」
- ・楊剛(東北財経大学)「社区合作社」
- ・胡加荣(首都経貿大学)「農民上楼」(都市社区に移住した農民)
- ・常向群(英国・ロンドン経済大学)「社区礼尚往来」(近隣ネットワーク)
- ・劉曉梅(滋賀大学)「農村の年金制度」
- ・張抗私(一橋大学)「女性労働者の現状」

北東アジア地域研究財団助成金セッション「中国の地方自治研究」(8階 8C)

科研費セッションB「中国の底辺階層研究」(同上)

「中国の地方自治研究」 司会 黒田由彦(名古屋大学)
コメンテーター 江口伸吾(島根県立大学)

- ・李曉東（島根県立大学）「中国都市における住民自治に関する一考察——北京石景山区魯谷社区を例として」
- ・唐燕霞（島根県立大学）「中国の村民自治についての試論—村民自治第一村からの考察」

「中国の底辺階層研究」 司 会 晨 光（神田外語大学）

- ・基調講演 中村則弘（愛媛大学）「和諧社会と中国の底辺階級」
- ・進捗状況報告 首藤明和（兵庫教育大学）「青海と西藏における底辺階級」
- ・今後の課題 中村則弘（愛媛大学），陳捷（愛媛大学），東美晴（流通経済大学），唐燕霞（島根県立大学），首藤明和（兵庫教育大学）

15：30～16：50 ミニシンポジウム「現代中国の生活変動」（8階大教室 8ABC）

司 会 唐 燕霞（島根県立大学）
 話題提起 飯田哲也
 話題提供 首藤明和（兵庫教育大学）
 王 錫宏（中国・中央民族大学）

16：50～17：00 閉会のあいさつ（8階大教室 8ABC）

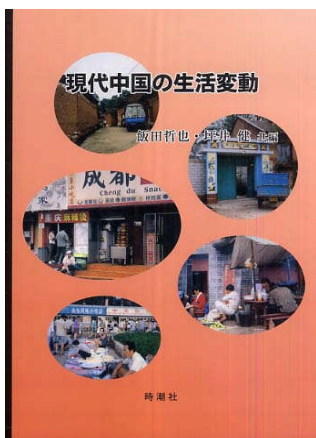
大会担当理事 過 放（桃山学院大学）
 大会実行委員長 陳 立行（日本福祉大学）

受付の近くにて

- 論著資料の配布コーナー（論文の抜刷やコピー，調査報告書などの配布）
- 書籍販売コーナー（著者割引での販売など）
- 中国の大学・研究機関紹介コーナー（資料やコピーなどを置いておく）
- その他（若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介など）

〈ミニシンポジウム「現代中国の生活変動」・文献案内〉

飯田哲也・坪井健(共編)『現代中国の生活変動』時潮社，2007年



- 序 章 現代中国の国民生活—1990年代の生活変動を軸に（飯田哲也）
- 第1章 家族変容と家庭教育（関穎）
- 第2章 現代中国の家族—自己愛家族の誕生（富田和広）
- 第3章 都市—基層管理体制の変動とコミュニティ形成（李妍焱）
- 第4章 中国都市の貧困層問題（李強）
- 第5章 中国の大学改革の進展と大学生（張海英）
- 第6章 在日中国人留学生の動向（坪井健）
- 第7章 生活と文化—流行り謡から見た現代中国の生活（文礎雄）
- 第8章 経済改革後の農民工と犯罪（羅東耀）
- 終 章 中国研究の行方—“あとがき”的提起（飯田哲也）

■ご挨拶と会長就任マニフェストの結果報告

日中社会学会会長 中村則弘 (愛媛大学)

「歳月不待人」、会長就任からはや三年が過ぎ、改選にいたりました。就任にあたっては「いま求められているのは行動力とそれを裏打ちする構想力だ」と公言し、この間いろいろと取り組んだつもりではありました。しかし、「三年という時間は余りに短かった」というのが、率直な感想です。種を撒き、苗床はつくったつもりですが、実った姿がもう一つ見えていません。その一方で、新たな課題の克服、新たな目標の達成が迫られています。

とはいえ、この三年間において、ささやかながら本学会のこれらの方向性は示し得たと確信しています。トランスナショナルな、クリエイティブな学会を目指し、さらなる努力を重ねて行く必要があると痛感してもいます。

さて、会報 42 号(2004 年 10 月)、9~10 ページに示しましたマニフェストについて、結果を報告いたします。改めて、これらの実行は容易ではありませんでした。ともあれ、微力ながらできる限りのことは行ったとの思いもあります。結果報告では、いかにも本人が頑張ったように書いておりますが、いうまでもなく、これら実績は担当理事のご努力のたまものです。この場を借りて、深くお礼申し上げます。

研究活動面

(1)中国での研究集会の定期開催…2006 年度までに実施

結果) 基礎準備は済ませました。しかし、定期開催については、中日社会学会との関係もあって任期内には実現できませんでした。

説明) 開催に向けて、中国側との基本合意、準備作業は済ませています。諸般の事情を見据えた上で、実行に移せばよいという段階にあります。

(2)主要領域におけるプロジェクトの推進…2007 年までに一部成果を刊行

結果) 日中社会学叢書というかたちで、部分的ながら成果を示す取り組みを行うことができました。

説明) 学会による刊行としたかったのですが、実現できませんでした。それはそれで、やむを得なかったと思っています。ただ、会員への公募を行うことができたのは、大きな意味があったと実感しています。その一方で、プロジェクト関連研究会の活性化が、大きな課題として浮かび上がってもきました。

(3)拡大研究集会の定期開催化…東日本と西日本でそれぞれ開催する。

結果) 拡大研究集会については、秋季研究集会として実施することができました。

説明) 大阪の城北市民学習センター、東京の筑波大学大塚キャンパス、そして松山の愛媛大学法文学部で開催しました。各々、国内中堅研究者を中心とするもの、若手研究者を中心とするもの、中国の研究者を招聘して実施するものというように、各研究集会の特色がよく現れるかたちとなりました。

編集面

(1)日中社会学研究の内容の総点検…順次実施

結果) 投稿規程の修正を行いました。

説明) 編集委員会の方から、何より投稿規程の内容が、時代の推移の中で実情にあっていないとの指摘がありました。編集委員長を中心に、投稿規程の内容の修正を実現しました。

(2)日中社会学研究の年 2 回刊行…2007 年度までに基礎作り

結果) ワーキングペーパー集の発行として実現することができました。

説明) 現時点において年 2 回の刊行は問題が多すぎるとの結論にいたりました。ただし、機関誌以外にワーキングペーパー的な刊行物の必要は強く認められました。加えて、下に記した資料集刊行との兼ね合いからも、この種の刊行物の発刊が求められました。そこで、ワーキングペーパー集として実現させることとなりました。

(3)資料集およびプロジェクト成果刊行の取り組み…2007 年度までに刊行開始

結果) ワーキングペーパー集、叢書の編集という形で実現することができました。

説明) この両内容ともに、すでに記しましたので割愛します。

組織面

(4)会員倍増への取り組み…2007 年度までに会員数を 250 人前後にする。

結果) 会員数は 200 名ほどにまでは達成することができました。

説明) 250 人を実現できなかったことは、大きな反省材料です。これから、ホームページの刷新、広報活動の充実などを通じて、会員数の増加に努めなければならないと考えています。また、実働会員の拡大も図らねばと思っています。

社会科学の学術研究の動向からも、世界情勢からも、日中社会学会の活動がいまの水準に留まっていはいけないと痛切に感じています。会員を増加させることは、いわば「天命」であると思えます。

(5)在外会員幹事の委嘱…2004 年度内に委嘱する

結果) 中日社会学会との関係もあり、正式な委嘱にはいたっていません。しかし、実質的には活動していただくことができています。

説明) 連絡体制、協力活動については、基盤を確立いたしました。中日社会学会との合意のもとに、正式な委嘱を待つことができる段階になっています。

(6)若手幹事の登用…10 名前後を委嘱する

結果) 若手幹事については、数名を委嘱することができました。

説明) 正式な委嘱は上記の通りですが、研究集会の運営、ニューズレターの記事などをみていただければ解かるとおり、10 名前後の若手が実質的に本学会の活動を支えています。実質的には、実現することができたといえます。

広報面

(7)ホームページの見直し…2004年11月までに作り直す。

結果) 新ホームページの試験運用までを行いました。

説明) ホームページの見直しは、なかなか手間のかかる作業でした。ほぼ放置状態にあったため、また運営方法に抜本的修正の必要があったため、新たな形での作成となりました。担当理事と担当幹事の努力によって、試験運用にまでこぎつけています。コンテンツの拡充をまって、本格運用に入ります。

(8)新規名簿を、研究分野などが入った使いやすい形で作成する。…次年度大会までに作成する。

結果) 新規名簿については、刊行を控えることにいたしました。

説明) 刊行を控えた理由は、近年、プライバシー保護が大きな問題となったからです。ただし、会員名簿につきましては、引継ぎ時点でかなり混乱しておりました。事務局の努力でこれを、全面的に修正・整理し、かなり間違いのないものとすることができました。

関連する内容

(9)中日社会学会との交流について

中日社会学会との交流事業に取り組んでまいりました。そのなかで、以下の内容について合意することができています。これから、幅広い交流の基礎づくりを済ませることができました。ニューズレター48号に掲載された合意内容を再録すれば、①中日社会学会正式設立にあたっての「交流協定」締結、②定期的な連絡体制、③研究集会、研究大会、研究会の相互開催、④研究・研究者データベースの作成、⑤共同出版事業の取り組み、⑥研究者ネットワークの整備となっております。

■中国研究の動向

知られざる「中国帰国者」 —「東北風」がもたらす境界文化—

南 誠^{liang}(梁^{xuejiang} 雪江)

(京都大学大学院)

2007年4月11日から13日までの間、中国温家宝首相の「融氷之旅」(氷解けの旅)がメディアをにぎわせた。

「你好，我是温家宝（ニイハオ。私は温家宝です）」

12日早朝、代々木公園をジョギングする温首相は公園で散歩する一般市民に微笑みながら、声を掛けた。警視庁は安全面の配慮から宿泊先の庭園で走るよう要請したにもかかわらず、温首相は「市民の声を聞きたい」との強い希望から実現された代々木公園でのジョギング。市民に微笑みながら話し、市民の輪の中に入って太極拳を舞う姿……。中国のトップレベルの指導者であるにもかかわらず、こんなに親しみやすいのかと多く人は驚いたに違い。「融氷之旅」の間は、日本のメディアは日中友好一色であった。

このような友好ムードの中で、私は温首相の4月12日の国家演説に注目した。その国家演説で、温首相は私の研究テーマでもある中国残留孤児について触れた。文章は長くなるが引用してみたいと思う。

中国の古い世代の指導者がかつて度重ねて指摘したように、あの侵略戦争の責任は、ごく少数の軍国主義者が負うべきであり、一般の日本国民も戦争の被害者であり、中国人民は日本国民と仲良く付き合わなければなりません。戦火が飛び散っていたなかで、聶榮臻元帥は戦場で日本人の孤児

(梅)美穂子さんを救助し、自ら世話をし、そして手を尽くして彼女を家族の元に送りました。1980年、美穂子さんは家族とともに中国へ行って聶榮臻元帥を訪ねました。この話に多くの人々が心を打たれました。

戦後、2808人の日本人の子供たちが中国に置き去りにされ、残留孤児となりました。戦争の苦痛をなめ尽くした中国人が彼らを引き取って、彼らを死の危機から救い出し、育てあげました。中日国交正常化の後、中国政府は孤児たちの肉親捜しに大きな支援を与えました。現在までにすでに2513人の日本人孤児が日本に戻りました。彼らの多くは帰国後に、「中国養父母謝恩会」などのような民間団体を自発的に設立し、中国で養父母たちの共同墓地と「中国養父母感謝の碑」を寄付・建立しました。その中に次のような碑文が書かれています。「中国養父母の人道的精神と慈愛心に深く感謝し、ご恩を永遠に忘れません」と。

昨年、1946年から行われた中国からの引揚げ60周年式典が中国遼寧省コロ島市で開催された。私もそれに参加してきた。その場でも、中国残留孤児の話が引き出されていた。このように、中国では中国残留孤児という存在は日中友好の証として語られがちである。また、近年、中国国内においては、引揚げや中国残留日本人に関する研究も盛んになりつつある。一方、日本国内では、昨年同じく中国からの引揚げ60周年式典が開催された。中国と比べて小規模だったという。

中国残留日本人が中国で注目されているのに対して、日本ではそれほど知られていない。

“中国残留孤児のことを知っていますか”。
“いや、知らないです”。“知りません”

ね”・・・・・・・・。

あるテレビニュース番組で、中国残留孤児のことがどの程度知られているのかについての調査があった。このように、ほとんどの人は知らないと答えていた。これが日本社会におかれている中国残留日本人たちの立場である。もちろん、中国残留日本人の親族を含むいわゆる中国帰国者という人たちのこともそれほど知られているとは言い難い。

現在、推定 10 万人の中国帰国者が日本で生活している。日常生活という私的空間において、その存在は在日中国人という影に隠され、ほとんど認識されない。なぜなら、日常生活の中で中国帰国者が中国的文化を実践しているからだ。係争中の中国残留日本人をめぐる国家賠償訴訟運動にともない、中国帰国者と日本社会と対面空間の拡大によって、その存在は以前より認識されるようになった。しかし、運動の中で、中国残留日本人が日本人というカテゴリーで語られるため、中国的文化を実践するその姿と乖離して、その存在が一層あいまいになっている。

中国帰国者はいったい日本人なのか、中国人なのか。彼(女)らの存在を知った多くの人がこのような疑問を持っているかもしれない。私も中国帰国者の一人として、彼(女)らは日本人でもなければ、中国人でもない、逆に日本人でありながら、中国人でもあると考えている。そんな中国帰国者が持つ文化を境界文化と私が呼びたい。その境界とは国境だけではなく、日本社会のエスニック境界、中国の少数民族関係なども指している。その境界文化の実践に惹かれて、今、研究調査している。

“俺们那嘎达(私たちのところ)”“咋地了(どうかした)”。

この独特な訛り、聞けばすぐにわかる。中国東北地域の方言一東北弁一であること、を。

今、この訛りが中国で流行っている。これは東北出身の芸人趙本山と関係していると思われる。彼は喜劇作品で全国的に有名になり、その後“綠色二人転(二人転のグリーン化)(注)”に力を入れて、東北の文化を全国に広めた。この訛りもその一つである。もう一つは経済発展に比較的遅れを取った東北地域の人が全国各地へ移動していることも関係している。たとえば、蘇州のある集合住宅(小区)の住民の多くは東北地域から来ている。その地域で東北出身の人のネットワークを築いたり、東北料理店を開いたりして、東北文化を広めている。このような東北文化の全国へ伝播していく現象を“東北風”と呼ぶことができよう。

このような中国国内の“東北風”とは別に、中国帰国者の存在、その境界文化の実践は日本にも“東北風”をもたらしているのではなかろうか。

注：「二人転」とは東北三省(遼寧・吉林・黒龍江省)を起源とし、流行ってきた民間芸能(語りと歌)である。これまで“低俗”なものとして捉えてきたために、そのようなイメージを抹消していくための活動である。

■ 回族自治区から見る中国社会（2）

回族の若者カップル婚礼模様

出和暁子
(日中社会学会会員・北京在住)

今回は、当県に住む回族の若者カップルの婚礼の模様を紹介したい。大都市では、回族が回族以外の民族と結婚することも容認されるようになってきているが、ここ回族自治区に至ってはあくまでも回族同士の結婚が前提となる(当県で回族は約20%)。これは法律上で定められているわけではないものの、今日でもなお、ここに住み続ける回族の若者たちが結婚相手を探す際、これは彼らの意識の中に根付いている。また、彼らの結婚適齢期は20代前半で初婚年齢は早い。しかし、最近では大学への進学志向が高まり、当県から外へ出て行く者も増えている。ちょうど冬休みで帰省して今回の挙式に参列したある大学生の女の子は「いい就職先が見つければ、都市で生活したい。ここへ戻りたいという強い思いはあまりないし、将来、回族と結婚するかどうかよくわからない」とし、ここで生活し続ける若者たちの意識とに違いが感じられた。(今回、回族の若者たちの結婚観を取り上げたいとも思ったが、細かいインタビューをとることができなかつたため、当日の婚礼の様子を中心にレポートすることにする)。

婚礼当日の朝、通常、新郎側が用意した車は新婦の実家へ新婦を出迎えに行く。しかし、数日前、同じ村から嫁ぎに出る花嫁がいて、婚礼当日、村の者がタバコや喜糖などをもっと置いていくことを要求し、大きな騒ぎに発展したらしく、混乱が再び起こることを避けるため、新婦はお姉さんが嫁いだ家(新郎の家から近い距離にある)に前日からそと入り、そこからの門出となった。

紅い服で着飾った新婦を乗せた豪華婚礼車が無事に新郎の家の前に到着すると、家で待ち構えていた新郎が、その車の前で何度もお辞儀をする。新婦側はなかなか新婦を車から降ろそうとしない(粗末に扱ってはいけない、大切にすると固く誓わなければ、私たちの大事な花嫁は渡さないといった意味合いが込められている)。そして十数回に及ぶお辞儀を経て、やっと車の扉をあけてもらった新郎は大勢の参列者の中を掻き分けるようにして新婦を抱きかかえ家の中まで連れて行く。その後、しばらくしてから挙式が始まった。

ここでは、回族独特の挙式が行われた。新郎新婦は「阿訇(アーホン)」の前に揃って立ち、阿訇がコーランを読み上げ、新郎新婦は阿訇の前で誓いの言葉を述べる。そして、皿に盛られた棗、落花生や喜糖(婚礼祝いの飴)が阿訇の手から新郎新婦に向かって投げられる。周囲に散らばったそれらを会場にいる参列者、とりわけ子供たちが必死になって拾うのである(写真No.1参照)。

写真 No. 1



挙式後、挙式参列者に対し「八大碗」という料理がもてなされる。これは、一卓八人、一卓に八つ碗が並べられ、料理の盛り付けには、すべて同じ形の器が使われる。特色ある料理の紹介として、天津の八大碗紹介には粗大碗、細大碗に分かれ、粗大碗は炒青蝦仁、

燴鶏絲、全燉蛋羹蟹黄からなるとある。しかし、当県の八大碗は、牛肉の煮込み二碗、牛の内臓の煮込み二碗、肉団子一碗、揚げ豆腐一碗、昆布一碗、人参一碗である（写真 No. 2 参照）。このように地方によってその中身が異なり、その土地の風土や食文化に合わせた特徴が感じられる（当県は牛羊業で潤っている）。挙式参列者が「八大碗」の料理でもてなしを受ける中、新郎新婦は各テーブルを回って挨拶をする。

写真 No. 2



料理でもてなした後、新郎新婦は最も重要とも言える共同作業を開始する。各挙式参列者から「喜銭（祝い金）」をもらうために再び回って、お辞儀をする。喜銭は紙に包んで渡すわけでもなく、お金をそのまま新婦のお付きの女の子に手渡す。誰がいくら贈ったかが一目瞭然なのである。また、世帯単位ではなく個人単位で贈るのである。新郎新婦に喜銭を渡せば挙式参列者は徐々に帰っていく。

通常、新郎側は家や家具を準備し、新婦側は花嫁道具として家電製品を購入すると言う。新婦が購入したものには金色で「喜喜」と書かれた紅い紙を貼り付け、人目でわかるようになっている（写真 No. 3 参照）。これもかなりストレートな表現方法である。新婦を向かえるために豪華婚礼車を予約し、そして、挙式前には高額を払って「婚沙照（結婚記念写

真）」を撮り、DVDアルバムとなって出来上がってくる。

写真 No. 3



このように、今日、農村では結婚にかなりの金銭が費やされ、挙式スタイルの面でも商業的、都市的な要素が含まれ、都市で行われる挙式とそれほど大差は感じられない。しかし、回族独特の「念経（コーランを読む）」、「八大碗」、そして婚礼の当日、新郎の両親の顔が墨で塗られる（写真 No. 4 参照）といった風習などは、都市では出会うことのできない回族自治区独特のものである。次回は、当県に住む回族の老人についてレポートできればと思う。

写真 No. 4



■留学雑感

地図に無い街

池本淳一
(大阪大学大学院・
中国社会科学院客員研究員)

大家好！池本です。実は四月から、私が日本語教師を勤める大学が大連市内から旅順の郊外に移転したため、今月はいろいろ大変でした。移転先は、大連駅から車で約一時間ほど、一言で言えば海辺の漁村です。聞くところによると、大連の総人口と富裕層の増加のため、旅順区は以前から郊外型都市として開発が進められていたそうです。しかし交通手段が車しかなく、また軍港があるためなかなか外資を導入できず、ベットタウン化は思うように進みませんでした。そのせいか、大連市中心と旅順区を結ぶ高速道路沿いには、誰も買い手のつかなかった新築住宅が点在しております。高原のペンション風をイメージしつつもなぜかピンクや緑色に塗られた、薄汚れたとんがり帽子の住宅たち。なんとなく、うらびれた遊園地の中のアトラクションを連想させます。そしてこの旅順開発計画の第二弾として進められているのが、大連市内にある大学の誘致です。聞くところによれば、遼寧師範大学、大連医科大学なども移転計画を進めているとか。

この背景には、次のような近年の中国における大学問題があります。現在、政府は大学生の入学者数増大計画である「拡招（クオジャオ）」を実施しており、年々、学部生・院生の数は激増しています。また、中国の大学はその予算の多くを自らの経営努力で補わねばなりません。そのもっとも効果的かつ有効な手段が、学内の教室や宿舎を使って自考（大卒資格取得のための独学試験制度）のための

予備校や、いわゆる社会人教育のための継続学院を経営することです。現在、この学生数の増大とキャンパス内の予備校化により、多くの大学で教室不足、宿舎不足が深刻となっています。この解決策のひとつとして出されたのが、郊外に新校舎を建設し、そこに学部生や院生を収容するというものです。このような学内の人口圧力と施設不足は大都市ではどこでも見られる現象ですが、おそらくあと数年もたてば、各地の郊外に次々と学研都市が生み出されるのでしょう。

で、その移転計画で、私の勤める大学がその先陣を切ったわけですが。まだ工事中の部分が多く、初めて新校舎を見たとき、どこの工事現場に迷い込んだのやら、と目を疑いました。キャンパス内には大型トラックやローラー車、クレーン車が疾走し、打工の人たちで溢れかえっています。このような状況なのですが、食堂は三階建ての立派なもの建っており、学食メニューをはじめとして上海ラーメン、四川料理、韓国料理、そして日本食までとりそろっております。なにはなくともメシだけは！！という気迫を感じられ、大変感慨深いものがありました。ちなみに日本食といっても、カレーや豚のしょうが焼き、コロッケ定食などが中心で、しかも看板にははっきり「洋食」と書いています。確かに洋食なんですけど…それを見た中国人学生が「？」となっているのがちょっと面白かったです。

またこの移転で一番興味深かったのは、いままで農村だったり、うらびれた新興住宅地であつたりした場所に、いきなり千人単位の人間が移住した、ということです。そして、このビジネスチャンスを逃すまいと、いろいろな業者が入り込んでくるわけで。例えば大学の近くには、ネットカフェや飲食店がならんだ通りがあります。ここに来た当初は、その通りの入り口には何もなかったのですが、移転二日目にして露天の果物屋が、一週間もすると野菜や煎餅、文房具、さらにはコピー

DVD 屋までやってきて、非常ににぎやかな一角となりました。また、大連市内にまで行く大型バスの業者も次々とやってきて、いまでは一時間に一回程度、市内行きのバスが出るようになりました。

こうして一ヶ月過ぎた現在では、日常生活では特に困らないほどになりました。実はまだこの大学のある場所には「住所」がなく、地図上では単なる山の中となっています。しかしこの地図にない街と、あつという間にそれを作りあげた中国人の商魂と生活力を間近で見ていると、中原の人口圧力のために、どんどん辺境にまで移住していった中国人のパワーの一端を見せ付けられるようでした。ではでは、今回はこの辺で。

■事務局からのお知らせ

□役員選挙結果について

理事選挙当選者（五十音順；敬称略）

東美晴，石井健一，黒田由彦，首藤明和，
陳立行，坪井健，唐燕霞，富田和広，
中村則弘，根橋正一（以上 10 名）

監査選挙当選者（五十音順；敬称略）

鍾家新，富田和広（以上 2 名）

監査選挙次点（五十音順；敬称略）

唐燕霞，永野武，細萱伸子（以上 3 名）

□大会出欠のお返事について

大会および懇親会の参加者数について、なるべく正確な人数を把握しておきたいと思えます。次のいずれかの方法により、ご連絡をお願いいたします。

(1) 同封の「日中社会学会大会参加・懇親会 申込書」返信用ハガキによるお返事

恐れ入りますが 50 円切手を貼っていた
だけ、5月16日(水)までに投函していただ

くようお願いいたします。

投函後のご変更は、次の(2)の方法により、
お願いいたします。ご変更がない限り、(2)に
よるお返事は必要ありません。

(2) E-MAIL によるお返事

同封の返信用ハガキをご参照のうえ、大会
への出欠、懇親会の申し込みを、以下の宛先
に、5月19日(土)までに送信していただく
ようお願いいたします。

宛先

nagano@cc.matsuyama-u.ac.jp

または

nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp

なお、懇親会については、大会が近づいて
からのご予約取り消しを受けかねる場合がご
ざいます。よろしくようお願いいたします。

日中社会学会ニューズレター No.50

発行：日中社会学会事務局
〒790-8578

松山大学人文学部永野武研究室

e-mail:nagano@cc.matsuyama-u.ac.jp

tel:089-926-7451（研究室直通）

fax:089-922-5415（大学事務室）

日中社会学会・郵便口座

口座記号番号：00140-9-161801

加入者名：日中社会学会

日中社会学会・公式 HP

<http://rezhongtest.hp.infoseek.co.jp/>

◎編集担当：首藤明和 shuto@hyogo-u.ac.jp

発行日：2007年5月